



遠山陽子編集・発行
「弦」34号2011年より



敏雄との出会いそして

「三橋敏雄俳句いろはカルタ」書肆まひまひ ナムーラミチヨ

三橋敏雄に出会えたのは、平凡社「太陽」一九八七年・俳句特集三月号の中村裕の企画取材のおかげだ。それは、当時のいわゆるトップ十二俳人（阿波野青畝、中村汀女、加藤楸邨、細見綾子、安住敦、桂信子、森澄雄、金子兜太、飯田龍太、三橋敏雄、鷹羽狩行、角川春樹）を配しての俳壇アスペクトを呈す試みでもあっただろう。それぞれのご自宅にも伺って直に受けた印象もふくらませての取材記事である。

「俳句」そして「俳人」というものへの彼の愛とか憧憬ほどの原稿にも溢れ返っていたし、なるほどと納得させられる簡潔な文体で組みあげられていた。入校前のその原稿を読ませてもらったとき、三橋敏雄だけがほかとはまったく違う……と思った。

とこしへにあたまやさしく流るる子たち

俳句作品から書き始めているのは、十二人中敏雄だけ。いきなり作品論から始められる俳人がいたのだ。彼はそういう特別な人物を見つけたんだ……と思った。

いよいよ雑誌が刷りあがると、秋山忠右氏の写真が凄い。とにかくどのページも凄いとしか言いようがない。敏雄のは斜め下から煽るアングル。怖い顔だ。会ってみたいと思った。火事後の仮住まいアパートでのこと、これから三橋先生のところへ新年の挨拶に行くという彼のために、清酒一升瓶を、まず白い画用紙で巻いてから捺染

の風呂敷はこれがいいだの何くれと、もう本当に懸命になって用意して持たせたことが忘れられない。

そうして、初めはゆう（裕）さんが単身で。そのうちに、「こうちゃんとミチヨさんはん？」と先生に訊かれて、小田原早川のシーサイドハイツ四〇三にやっぱり家族一緒に暮らすことになった。こうちゃん（虎州巳）は中三を前に小田原の城南中学に転校することを自分から決めた。三橋先生が好きだからと。そのまま横浜にいたら「誰もが知っている一目置かれるコスミ」だったのに……。今思うと、危ない転校生を乗り切った。中学生だって、こういう家庭に生まれたからには、自分もクリエイターになることは自覚している。三橋敏雄が自分にとってどれだけ大切な存在になるかは、全身全霊で理解できていたのだろう。

孝子さんが優しくかった。あつたかい。本当にありがたかった。甘えさせてもらった。わたしは自分の意見がうまく伝わらないとき、堪えきれずに孝子さんに当たったりしたんだ。全部覚えてる。

その頃のわたしは、自分のアートはというとコンセプトチュアルアートにひどく傾倒して……。敏雄はいつだっていきなり作品論から始められる。これはもうわたしのど真ん中だ。例えば、絵の具とかキャンバスが何かの説明の道具として利用されるんではなくて、絵の具そのもの、キャンバスそのものが「美」そのものであり得るというコンセプトでもって、敏雄俳句の作品論に分け入ってゆく。言葉そのものが持っている可能性に敏感であるか、鈍感であるかの話だ。これは怖い話である。

そういう話を、わたしは池田澄子さんの処女句集『空の庭』出版記念パーティ会場でスピーチした。そうだ！夏石番矢もいて、わたしのスピーチの、今やアートはシュールレアリズムなんかじゃない、敏雄俳句においても自明のコンセプトチュアルアートなのだといったところに、なんだかとてもいい感じにかみついてきてくれたのを思い出した。「良かったよ」と声をかけてくれたのが大高芭瑠子さんだった。これはずっと忘れていない。

もしも自分が敏雄と出会えてなかったら……と、わざと想像してみるんだ。それはきつと、寂しさの自覚もないままの寂しさの中、たぶん何とか明るく凌ぐはずだ。そして、あるとき、ふっと気づく……。悲しすぎる。

追想とか回想というのは、「あのときは」とひとくくりにしていたことに改めて思いを巡らすということだろう。でも、三橋敏雄と出会ってそして、ああなって、こうなって、あれもこれもずっとそのままの中でわたしは生きている。たまに朝から飲みたくなる。敏雄ちゃんから誘われたんだなって思って素直に飲んじゃう。美味しい。

『三橋敏雄俳句いろはカルタ』発行年二〇〇〇年十二月。一年間の制作記録ファイルが五冊。いつも本棚の背表紙だけちらつと見て見ないふりをしていただけれど、取り出して重ねると十センチくらいの高さになる。ぱらぱら開いているうちに、だめだ、やっぱり心臓がどきどきしてきた。

敏雄カルタの最初は、「あいうえおカルタ」だった。それは一九九三年ころのこと、仲良し家族間で考案された遊び道具で、選句は中村裕と越智洋。絵札は平明なタッチで、色鉛筆でさっさと描いたようなもの。五才の草平は「鬼やんま長途のはじめ日当たれり」が誰かに取られるとしょんぼりした。七才のさとみは「待つとなき天変地異や握飯」が気に入っていた。あるとき、このカルタが先生に見つかった。白状するみたいに、一枚一枚広げて見せると、驚いた顔で「ミチヨさんは最高の理解者だ。僕の俳句はみんな分かっているようで、そうでもないんだよ」と。

以来いつか必ずと約束した敏雄カルタの企画出版がようやく叶えられそうになったきっかけは、一九九九年、虎州巳とわたしが東京に移り住んだその年の、十一月十二日の大高弘達さんご夫妻の句集出版記念パーティ会場での歓談のおり、敏雄が「読み札は僕が書くから」と声をかけてくれたことでスイッチが入った。当時わたしの仕事も激減していて時間はある、暮らしのための多少の蓄えはまだ残っている、やれるなら今しかないと思った。

二〇〇〇年はカルタ制作で丸一年が費やされた。改めて「いろはカルタ」としてナムーラミチヨ選。六月にはほぼ原画を描きあげ、それから、本当に苦労と不安と感動と焦慮の連続だった。単純計算で、二千円で販売するには三千部以上売り上げる規模でないと。一万円弱で三百部ならやれそうだ。この際、工芸品としての価値も考えて和紙裏張りの特装版もできたらいいね。なにしろ敏雄自ら僕は営業販売部長だからと徹してくれて、制作本部長のわたしは、とにかく印刷所がどこもやりたがらないので困った。横浜のポートサイド印刷の河村啓子さんとはイラストの仕事で気心も知れている同年。彼女も俳句をやっている。「うちでやってあげるよ」と言ってもらえなかったらどうなっていたらだろう。

奥野カルタ店の社長は三回目にはやっと本気になってくれて、田村將軍堂を紹介してもらい、京都のカルタ工房にも行って和紙裏張りのお願いができた。寄せ木細工の木箱は露木清勝さんが、小田原市行政のアート文化活動の仲間どうしだった誼みで、木箱だけで二万円はするはずの素晴らしいものを仕上げてくださいました。この特装版百部限定はもちろん即完売。敏雄ファンへの最高のプレゼントになったと思う。

わたしがアート性デザイン性において勝負をかけたのは黒い紙箱の方だ。真っ黒の紙が期せずして新発売のスーパードラック。ラベルの白い英文字も自分でシルク印刷。カルタにはぐびきという紙にこれだ！と思った。ところが色校があがって刷り見本にショック。思いあまってBMWマガジン誌の用紙担当で面識があった竹尾の平戸さんに電話。カルタの絵札にぐびきは最高の選択であったこと、印刷所にはインク圧盛りの指示をというアドバイスに、サンプル紙として相当数を無償提供してくれた。わたしは印刷工場に入れさせてもらって、機関車の先頭車両みたいな自動四色機の前で思いの限りの注文をつけながら、刷りだしの調子がみるみるあがってゆく醍醐味。貴重な体験をした。

難問は、面取りの都合でどぶがないので化粧断ちができないことだった。申し訳ない。発売当初の発送では検品が間に合わなかったのが悔しい。十二月十三日青山の葛サロンでの展示会に何とか漕ぎつけた後は、しっかりと在庫管理に集中して、ばら札も用意できているので不良品のご連絡いただければありがたい。

『三橋敏雄俳句いろはカルタ』書肆まひまひの販売成果はというと、読売新聞で知っ

てご注文くださった方が一人。「俳句」に出した広告にも問い合わせ皆無。本当に限られた方々にだけで支えられたこんなにも贅沢なアート。増刷も期待したが初版三百部、まだ三十箱ほどが、次の世代の敏雄ファンとの出会いのために、大事に届けてゆきたいと願っている。

京しぐれ後の世はるか前の世も

敏雄

